大分県立芸術文化短期大学研究紀要　第31巻（1993年）

『ジェイン・エア』
― 隷属と自己犠牲のはざまで ―

Jane Eyre : Swaying between Servitude and Sacrifice

入　野　賀和子
Kawako Irino

ABSTRACT

We can frequently find words such as 'servitude','slave','sacrifice','obedience','mutiny' or 'rebel' in *Jane Eyre*. These words reflect the severe reality that women were subjected to subservience in the patriarchal society of England in the 19th century. They suffered from conflicting feelings —— the desire for rebellion and the fear of the opposition of society. Charlotte Brontë fully depicted these conflicting desires by choosing the master-governess (i.e. dependant) situation. This situation also symbolizes the woman's position in patriarchal society and is best suited to explain the hardships woman had to meet. In this paper I analysed Charlotte Brontë's conception of the ideal equality between men and women by emphasizing the words 'servitude' and 'sacrifice.'

女性を主人公とする小説は数限りなくあるが、多くの場合「財産」「家柄」「保護者の有無といった家庭的環境」「美貌」、これらの要素のいずれかの組合せで物語が展開される。例えば女性作家の先駆的存在であるファニー・バーニーは、孤児もしくはそれに相当する境遇の女性を好んで主人公に選び、保護者不在もしくは不適格な後見人のために女主人公が陥る数々の危険を描いたし、あるいはまた女相続人であるが故に遭遇する誘惑や試練を描いたりした。しかしいずれの場合も女主人公は、美しい美徳の女性として登場する。このようないささか現実離れの風潮を揶揄してジェイン・オースティンは『ノーサンガー寺院』(1818) の中では、子供時代のキャサリンをお転婆で勉強嫌いの無器量な娘に仕立てている。しかしそれでもキャサリンは15歳ぐらいに成長した頃には、「そこそこの美人」と言われるぐらいになるのである。(1)

それではシャーロット・ブロンテはどうであろうか。『シャーリー』(1849) の中のシャーリー・キールダーやキャロライン・ヘルストンを除くとお世辞にも美人とは言い難い女主人公たちばかりである。シャーロットは妹のエミリーやアンと、それぞれが取りかかっていた作品やそのプロットについてお互いに話し合い、時には書き上げた部分を読んで聞かせたり、意見を求めることもあった。こうした折、シャーロットは妹たちに「女主人公を当然のことのように美しい女性にするのは間違っています。私と同じように不器量でちっぽけな女主人公があなたたちの女主人公と同じように興味ある人物になることをお見せしましょう」と言い、こうして「ちっぽけで不器量な」ジェイン・エアの物語が誕生したのである。(2)

家父長制社会の中で寄食の立場に甘んじることを常に押しつけられてきた女性は、扶養されるための代償として当然のことのように美しい容貌、盲目的従順といったものを要求されてきた。シャーロット・ブロンテは、このようないわゆる世間的常識に逆らうかの如く、孤児で一

文無しで友人もなくおまけに無器量という致命的ハンディキャップを自らの女主人公に負わせたのである。ジェイン・エアの物語は、世間的価値観から言えば誇れるものを何も持たない女性が、想像を絶するほどの苦難に立ち向かい自立を手にいれるという、一種の教養小説であるが、自立に至る過程には、'slave' 'servitude' 'sacrifice' 'obedience' 'submission' 'mutiny' 'rebel' 'revolt'といった言葉が頻繁に出現する。『ジェイン・エア』(1847) は、ゲーツヘッド、ローウッド、ソーンフィールド、マーシュ・エンドと舞台が移される度に繰り返される幽閉と逃亡をモチーフとした物語だと言われるが、(3)それはまた女性が真の自立を確立するまでに経験する、社会の枠組みの中で強要される「従順」とそれへの「反抗」との間で激しく揺れ動く心の軌跡を描いた作品でもあると言うことができるであろう。本稿では'dependence' 'servitude' 'sacrifice'といった語を手がかりに、この心の振れ動きの軌跡を追っていきたいと思う。

1

「あなたはリード夫人のお世話になっていることを心に留めておかなければなりませんよ。夫人はあなたを養って下さっているのですよ。あの方に見放されたら救貧院に行かなければならないのですよ。」(4)このようなジェインの寄食の立場を非難する言葉がジェインの子守歌がわりであり、物心ついて以来ジェインにとっての最初の記憶であった。ジェインはまだその意味もよくわからぬうちから、'dependent'ということが如何なることかを骨の髄まで思い知らされる。生後まもなく両親と死別したジェインは、人生の基点から帰属すべき場所をもたない余計者である。リード夫人は夫の遺言でこの血のつながりのない、全く反りが合わない姪を扶養しなければならないことに苛立ちを隠せない。リード家の一家団らんから完全にはじき出されているジェインは、その輪の中に受け入れられるために、「へりくだり、気に入られるよう努めること」(45) を求められる。

跡取りというだけで甘やかされて育った長男ジョンは、厄介者であるジェインに自らの地位を誇示しようとして、もうすでに横暴な家長の片鱗を見せ始めている。ジェインの身分のあいまいさを常に思い知らせようと理不尽な暴力を振るうジョンは、ジェインにとっては「暴君ネロ、カリギュラ」あるいは「奴隷の監督」であり、激しい憤りからジョンにつかみかかるジェインは「反乱を企てた奴隷」にたとえられる。そしてこの言葉は、はからずもジェインの置かれた状況 —— 隷属の立場を象徴するものである。小さな家長に逆らった罰として、ジェインは「赤い部屋」に閉じ込められる。カーテン、絨毯、家具を被う布までもすべて緋色の赤い部屋は、ジェインの亡き叔父の寝室だった部屋で、彼の死後使われることもなく、ほとんど開かずの間になっている。しかし叔父が臨終をむかえたこの部屋は、謎めいた不気味な雰囲気を漂わせ、今なお陰うつな厳粛さでリード家全体を支配している。赤い部屋はまさに家父長を象徴する部屋であり、その中に幽閉されたジェインには「これ以上堅固な牢獄はない」(46) と思われるのである。幼いジェインにとって、全世界にも等しいゲーツヘッド邸の、その象徴ともいえる赤い部屋は、彼女を捕らえ閉じ込めている社会と重なり合うものである。赤い部屋に閉じ込められ、叔父の亡霊の幻影に脅えたジェインには、隙間から入り込んできた光が「あの世からやって来る幻の前ぶれ」のように思われ、恐怖のあまり錯乱状態に陥る。「胸がどきどきして頭が熱くなってきた。物音が響き渡り、激しい羽ばたきのように聞こえた。何かが近づいてくるようだ。胸が苦しくなり、息がつまりそうだった」(49) とジェインは語る。ここから脱出する

術はジェインには見つからない。この閉塞感は、この後何度か危機的状況に陥る度に繰り返し経験されるものである。

大人になったジェインは次のように回想する。「私はゲーツヘッド邸にはふさわしくない子供だった。…もし私が陽気で華やかで無頓着で、我がままな美しいお転婆娘であったなら、同じように居候の寄る辺ない身であっても、リード夫人はもっと満足して私の存在に我慢してくれたことだろう。」(47) つまり従姉のイライザやジョージアナのような「陽気で華やかで無頓着な」存在になることを求められるのである。しかし子供心にもジェインは、彼女たちが尊重され、ちやほやされるのは、財産と天使のように愛らしい容貌のおかげであり、それ以外の何の資質も関係のないことを冷ややかに見てとっている。利己的で尊大で自分の思い通りに振舞っているように見えるイライザとジョージアナも、所詮は家父長制社会の堅固な牢獄の囚われ人なのである。

「なぜ私は気に入られないのだろう。気に入られようと努力しているのに、どうしてわかってもらえないのだろう」(46) と、愛に飢えたジェインは苦悶する。「人間は何かを愛さないではいられない」(61) という孤独の叫びは、ローウッド校でヘレン・バーンズに出会ったとき、より具体的で明確な言葉となってジェインの口をついて出てくる。

> 「…私も、自分が正しいと信じなければいけないことはわかっているの。だけど、それだけでは足りないわ。もしほかの人が私を愛してくれないのなら、私は死んだほうがましだわ。一人ぼっちで嫌われているのは我慢できないわ。…私が心から愛している人から本物の愛情を得るためだったら、自分の腕の骨を折られても、雄牛の角でほうり投げられたって喜んで我慢するわ。あばれ馬の後ろに立って、蹄で胸を蹴られたってかまわないわ。」(101)

愛する者のためには我が身を投げうつという燃えるような自己犠牲の精神、それはまた過剰な自己抑圧にもつながる危険性をはらむものでもある。ジェインの中に潜む自己犠牲への願望と非道で理不尽な圧迫への激しい反逆精神、この両極の間でジェインの心は常に揺れ動いている。愛情に飢え、愛情を与える対象もなくまた愛情を注がれることもない、乳母のベッシーから時折示される気まぐれなやさしさだけが救いの、息苦しいほどの抑圧に満ちたゲーツヘッド邸での生活は、隷属から反抗、再び隷属のくり返し以外の何物でもない。

2

ゲーツヘッドが家庭という最小単位の中でのジェインの寄食の立場を彼女に教える場であったとすれば、ローウッドは社会の中での孤児の置かれた立場をジェインに教え込む場であった。ローウッド校に入学してまもなくジェインはヘレン・バーンズから、自分たちは慈善学校の生徒であり、そこでの経費の大半が富裕な紳士階級からの寄付で賄われていることを教えられる。慈善学校の生徒として神の教えのもと、いわばひとつの家族を構成しながら、この神の家も愛からはほど遠い場所だった。

「黒い柱」のように不吉で威圧的で、「彫ったお面のように厳しい顔つき」のブロックルハースト牧師は、徹底した禁欲主義による教育を唱えるが、実はそれが精神的にも肉体的にも完全

な隷属状態を子供たちに強いることになるばかりでなく、子供たちに自分たちが慈善の施しの受け手であるという卑屈さまでも教え込むことになるのである。口にできないほどまずい食事の代わりに、もっとましなものをと、チーズつきパンを与えたテンプル先生に、ブロックルハースト牧師は次のように演説する。

「…私の生徒に対する教育方針は、生徒たちを贅沢や気ままな習慣に慣れさせるのではなく、頑健で、忍耐強く、克己心に富む人間に育てることにあるのです。例えば料理法がまずいとか、煮え方が足りないとか、煮えすぎているとか、そういった食欲の減退をきたすささやかな事件が起こっても、その埋め合わせにもっとおいしいものを与えたりして、せっかくの機会を無効にしてしまってはなりません。そうすることによって体を甘やかし、この学校の目的を損ねることになるのです。一時的欠乏に対して忍耐を発揮するように生徒たちを励ますことによって事件を精神的教化のために活用すべきです…あなたが焦げたおかゆの代わりに、チーズつきパンを生徒の口に与えるとき、あなたは彼女らの卑しい肉体を養うかもしれないが、彼女らの不滅の霊魂をどれほど飢えさせることになるかということについては、少しも考えて下さらない。」(95)

このような演説を行ないながら、その一方で自分の家族のきらびやかな服装を満足気に眺めているブロックルハースト牧師の偽善ぶりが皮肉を込めて描かれているのは明らかである。しかしこのこと以上に有害なのは、彼の教育方針が人間の尊厳どころか、卑屈さを生徒たちに植えつけていることである。秩序正しい質素な暮らしの背後にあるものは、飢えた上級生が下級生のわずかな食事までも取り上げてしまうという、より陰湿な弊害を生み出すことである。

ブロックルハースト牧師は、キリスト教的忍耐や克気の精神を説きながら、生徒たちを文字通り飢え凍えさせる。彼が教えるものは神の愛や魂の救済ではなく、罪人たちが落ちていく「火と硫黄の池」の恐ろしさである。「我々は持って生まれた本性のままでいてはなりません」(96)と、肉体のみならず自然な感情の発露までも抑圧し、さらにはリード夫人の言葉を借りれば「役に立つ謙虚な子」(66)になるようにという教育方針は、人間格差の是認と、慈善を施される側の卑屈な隷属状態を生み出すものに外ならない。

しかしこのような抑圧状態にあって、ジェインはテンプル先生とヘレン・バーンズという愛情を注ぎうる対象を初めて見出す。テンプル先生はその名が示す通り、月光に包まれた静かな大理石の神殿を連想させる人物であり、生徒たちを秩序、献身、良識の光で包み込む。

テンプル先生にはいつもどことなく落ち着いた雰囲気があり、態度には威厳が、そして話し方には洗練された礼儀正しさがあって、熱狂や興奮、激しさとは無縁であった。彼女に接する人の喜びを畏敬の念のもつ抑制するような感じで抑え込んでしまう何かを持っていた。(104)

ジェインにとって「母であり、教師であり、友人」ともなるテンプル先生は、「畏敬の念のもつ抑制するような感じで抑え込んでしまう何かを持っている」というように、ジェインが内に秘めている抑えがたい衝動を理性によって穏やかに抑制する。もちろんテンプル先生とてもブロックルハースト牧師の独善的支配には怒りを覚えている。そんなときの彼女は「まっすぐに前

方を見つめ、大理石のような生来の青白い顔が本物の大理石がもつ冷たさと堅さを帯びてくるように思われた。ことにその口は、それを開くには彫刻家ののみを必要とするかのようにきゅっと閉じられ、額はだんだん石のような峻厳さを見せ始めた」(95) と表現されているように、ひたすら沈黙による抵抗を示す。物静かで生真面目で率直なジェインを、ロチェスターは「尼僧」のようだと言い、表情や声や態度を抑制しようとするローウッド方式がしみ込んでいると指摘するが、テンプル先生はジェインに淑女としてのたしなみを手ほどきし、理性的合理的精神による自己抑制で、抑圧に満ちた社会と折り合っていく方法を呈示する。

一方ヘレン・バーンズは、抑圧から解放されるもうひとつの方法 —— 自己否定による解放をジェインに示す。14歳という年の割に大人びた、聖女のようなヘレンは、この世の労苦からの解放は、死によってのみもたらされると信じている。しかも死は彼女にとっては終着点ではなく、神のもとでの公正、平等という永遠の至福への入口である。神の国にすべての幸福の源があると信ずるヘレンは死に急ぐように短い生涯を終える。生きている現在しか信じられないジェインには、ヘレンの理想とする神の国は理解しがたい概念である。しかしヘレンが折々に語った言葉、例えば「避けることができない場合には、それにじっと耐えるのが義務よ。耐えなければならないのがあなたの運命なのに、それを耐えられないというのは意志の弱い愚かなことだわ」(88)、あるいはまたリード夫人の冷酷な仕打ちを憤るジェインに対して「夫人の苛酷さを、それがあなたに引き起こした激しい感情といっしょに忘れようと努めればあなたはもっと幸福になれるのではないかしら。恨みを抱いたり、不当な仕打ちを忘れずに過ごすには、人生は余りにも短すぎるように思われるわ」(90) といった言葉 —— これら忍耐と寛容に関するヘレンの考え方は、これを言われたときのジェインには理解しがたいものだったが、ローウッドを離れて以降のジェインの内面生活に多大な影響を及ぼしている。それはジェインを淑女に仕立て上げたテンプル先生以上の影響力をもつものであったと言えよう。

しかしジェインには愛し愛されたいという欲求のほうがより重大な位置を占め、これがジェインの生命力の源ともなっている。敬愛するテンプル先生がローウッドを去ると、義務と秩序に忠実で、修養を積んだ従順な人間であろうとする意欲の源泉を失ってしまうことになる。ジェインが改めて直面するのは、彼女自身の内に一貫して存在している燃えるような自己実現への願望と、抑圧への激しい憤りである。ジェインは現実社会の中で、これらと向かい合っていくための、テンプル先生ともヘレンとも異なるジェイン自身の解決策を求めていかなければならないのである。「生まれながらの自分の中にとり残された」(116) ジェインは、より活動的な「希望と恐れ、感動と興奮に満ちた変化に富んだ領域」(116) が目の前に広がっていることを思い、広い世界への憧れを抑えきれない。しかしこの「自由」、「変化や刺激」といった高揚感は、現実を前にしてはむなしく風に吹き飛ばされてしまう夢想にすぎない。身寄りのない孤児にできる選択とは、「少なくとも新しい奴隷仕事」('at least a new servitude') (117) を見出すことでしかない。抑圧に満ちた社会の中で女性に許された極めて現実的かつ憂うつな選択である。

3

女性の書く恋愛詩は概して私—彼という形の詩ではなく、私—あなたという形の詩であるように思われる。その結果生まれるものは、女性が愛している特定の男性に宛てた韻文

> の手紙であって、「彼」について書かれたものではない。女流詩人たちは、「彼の目」「彼の髪」「彼のほほえみ」をたたえたりしない。彼女たちは主として「私」のことを書くのだ。不思議にもそこからある種のリアリズムが生じる。恋人は実在の男性のように見える。なぜなら彼は「あなた」であるからだ。[5]（傍点筆者）

エレン・モアズのこの女流詩人論はまた、シャーロット・ブロンテの場合にも当てはまるようである。つまりシャーロット・ブロンテはロチェスターという人物を通して、より雄弁に自分自身を語っているように思われるからである。そこには愛と自立と平等についての彼女の理想や願望が燃えるような思いと共に語られている。エレン・モアズはさらに続けてこう語る。「男性の恋愛詩と同様、女性の恋愛詩でも、愛する者より愛される者のほうが、優った立場にいる、神聖あるいは高貴な対象として高く位置されねばならないというのがこれまでの慣習的考え方である。しかし女流詩人たちは恋人たちを高くても低くても、とにかく同時に平等の立場にいるものと想像することに特に心をくだいているように思われる。」[6]そして男女いずれの性かはっきりしない天使の比喩を女流詩人たちが多用したように、シャーロット・ブロンテはジェインとロチェスターの出会いにこの世のものではない「妖精」や「ガイトラッシュ」の幻といった神秘的要素を持ち込んでいる。ゲーツヘッド、ローウッド、マーシュ・エンドを舞台に展開される章は、いくらかの誇張や都合のよい偶然の一致といった多少の不自然さはあるとしても、家父長制社会のもとで女性たちが実際に直面する抑圧、苦悩、反抗といった、厳しい現実を取り扱っている。しかしソーンフィールドで繰り広げられる章は、シャーロット・ブロンテが思い描いた理想的男女関係を探求した章といえるものである。「読者よ、私は彼と結婚しました」(474) と誇らかに宣言するまでの、恋愛における男女間の力の闘争の記録である。

主人と女性家庭教師、この関係は主人と小間使いという形で展開される『パミラ』の再現を予想させるものである。しかしジェインとロチェスターという、ふたりの強烈な個性のぶつかり合い、もしくは闘争は、階級差といった世間的常識が入り込む余地を与えないほど最初から彼らふたりは対等な魂としての対話を求め合っている。そしてふたりの出会いがまさにこのことを象徴している。旅人と通りすがりの者という出会い、これは社会的階級や性差など一切関係ない全く対等な出会いである。しかもその旅人は凍てついた道で落馬し、ジェインの助けなしには歩けない。浅黒くがっしりした体格、男性的力強さにあふれ、高圧的なロチェスターから助けを求められることは、ジェインの中にある力への憧れと自己犠牲というふたつながらの欲求を同時に満たしてくれる魅力も合わせもっている。

ジェインが家庭教師であるという状況は、女性の置かれていた隷属状態を端的に物語るものではあっても、ここではそれ以上に特別な意図が込められているようには思われない。シャーロット・ブロンテの関心が、家庭教師の悲惨な現状の告発に向けられていないのは明らかであるからだ。屋敷の管理を任されているフェアファックス夫人は、ジェインと同じ雇われ人であり、ジェインに好意的である。教育はすべてジェインに一任され、余計な口出しをする者もなく、生徒のアデールは従順である。「周りの景色を楽しむための自由な時間も自由な考えも持てないのです…私のことを理解しようとする気持ちなどなく、私のことで気にするのは、どうしたらできるだけたくさん働かせられるかということだけなのです。」[7]というようなシャーロット・ブロンテ自身の屈辱に満ちた体験は語られない。もちろんダイアナやメアリー・リヴァーズの家庭教師先の家族は、彼女たちを「卑しい使用人」としかみなさず、「料理人の腕前や小間

間使いの趣味を評価するのと同程度にしか、彼女たちが習得したたしなみを評価しない」(379)という苦々しい現実は厳然として存在する。しかしジェインの家庭教師先での生活は驚くほど幸運である。とは言え、ジェインにとって労働は最終目的ではない。彼女はもっと自由で有意義で活動的な生活を求めている。その欲求が満たされないのなら、平和で単調な家庭教師としての生活は、新たな牢獄への幽閉でしかない。ジェインが憧れてやまぬ広い世界は、世界中を放浪するロチェスターという人物となって彼女の前に姿を現わす。活動的な外の世界が持ち込まれたソーンフィールド邸は、もはや沈滞した場所ではなく、彼を通して外へと開かれた刺激と興奮に満ちた場所へと一変する。

逆説的な言い方になるが、主人と家庭教師という関係は、ジェインの内に潜むせめぎ合う欲求をまさに満たしてくれるという意味で理想的状況といえる。孤児としての境遇がジェインに身を守る手段として従順を要求し、ぎりぎりまで自己を抑制する習性を植えつけてきた。それはまた逆に力あるものへの憧れへとつながりうるものである。力あるものに従い敬いたい、と同時にそれを支配してもみたいという、このぶつかり合う欲求 —— これは主人と使用人の関係においてより鮮明な形をとる。支配し支配される関係が、時に逆転するという刺激的、魅力的関係となって展開されるのである。「私の主人であり恋人である」(297)ロチェスターとの関係は激しくジェインの情熱をかきたてるものである。

共に愛と安住を求めるジェインとロチェスターは、「同じ人種」である。狂人となった妻を幽閉するという暗い秘密をもつロチェスターは、バーサとの結婚では得られなかったもの、自らの魂に呼応する相手を求めている。ソーンフィールド邸の主人として改めてジェインと対面したとき、ジェインの尼僧のような従順さの中に秘められた大胆なまでの率直さにロチェスターは強く印象づけられる。それはまたロチェスターに、好奇心に満ち、生命力あふれる小鳥が籠に閉じ込められている痛々しい姿を連想させることにもなる。

> 「…あなたは笑うことはないのですか。…めったに笑うのを見ないものだから。でもあなたは、本当に楽しそうに笑えるのですよ。私が生まれつきふしだらでないように、あなたも生まれつき禁欲的で厳格な人ではないのですよ。ローウッドの束縛から今なお解放されていないところがあって、あなたの表情を抑えつけ、声をひそめさせ、手足を拘束しているのです。そしてあなたは男性、あるいは兄弟——父親、主人、誰でもいいが——そういった人の前では、あなたはあまりにも陽気に笑いすぎたり、自由に話したり、活発に行動することを恐れている。しかしやがて私に対してはあなたは自然に振舞うようになると思います。私があなたに対して世間なみの型にはまった態度がとれないとわかったように。」(169-70)

ロチェスターは、ジェインの中にもある家父長制社会から押しつけられてきた女性の自己抑制への傾向を見てとり、その過度の自己抑圧こそが、真に対等な男女関係を生み出す障害になっていることをにおわせている。因襲にとらわれない対等な男女関係への可能性を、ジェインの口ではなく、ロチェスターを通して語らせることによってシャーロット・ブロンテは、真に対等な関係を生み出すには、男性側の認識と男性側からの歩みよりが不可欠だと主張しているように思われるのである。

ジェインが、男性的な荒々しさと共に、相手の心の内まで読みとってしまう繊細な感受性を

合わせもつロチェスターに惹かれるように、ロチェスターもジェインの従順さと手強さに強く惹かれていく。「しなやかであると同時に堅固、従順でありながらしっかりとしてぐらつくことがない」(289)ジェインの性格はロチェスターを魅了し、「あなたは私を喜ばせ、私を支配する。── あなたは服従しているようにみえる。そして私はあなたが見せるその従順な感じが好きだ」(289) とロチェスターは告白する。ロチェスターにもある支配し、支配される喜びは、ジェインの次のような言葉と完全に一致するものである。

> …私は彼をじらせては、なだめる喜びを知った。それは私が何よりも喜びを感じているものであった。そしてある堅実な本能が、私がやりすぎることがないよういつも注意していて、彼を怒らせるぎりぎりの線を越えることは決してなかった。瀬戸際のところで私は自分の腕前を試すのがとても好きだ。相手を尊重するどんな細かい形式も、自分の身分にふさわしい礼儀正しさもなおざりにすることなく、しかもなお恐れたり、ぎこちなく遠慮したりせずに彼と議論を戦わすことができた。これは彼にも私にも合っていたのだ。(187)

ジェインは、ミス・イングラムの高慢で浅薄なコケットリーを冷ややかに眺めているが、ジェイン自身「子羊のような従順さとキジバトのような感受性」(302) もまた、ロチェスターを決して満足させるものでないことを見抜いている。従順ななかに適度に自己主張を織り混ぜるという、男女関係における、この魅力ある駆け引きは、度を超すとジェインに対する読者の信頼性を損ないかねない危険をはらんでいる。しかしふたりが精神的に対等な存在として求め合っていることを最終的に認識し合うのは、あくまでもミス・イングラムへの偽りの求婚者の役を演じようとするロチェスターに、ジェインが我知らずあげた苦悶に満ちた叫びだった。

> 「…私が貧しく名もなく不器量でちっぽけだからといって、私には魂も心もないとお思いですか。大変なお考え違いです。私はあなたと同じように魂をもっています。そして同じように豊かな心も。もし神様が私にいくらかの美しさと、たくさんの財産を与えて下さっていたら、私から離れることがつらいとあなたに思わせることができたでしょう。今私があなたから離れるのがつらいと思っているように。私は今、習慣やしきたりを通してあなたに話しているのではありません。ましてや滅び去る肉体を通してでさえありません。あなたの魂に話しかけているのは私の魂なのです。ちょうど私たちがお墓の中を通り神の前に対等に立っているように ── 今の私たちのように。」(281)

もちろんロチェスターは、ジェインとの精神的対等関係を認めている。しかし現実生活にあてはめてみると、対等ということはそれほど容易なことではなく、ここからジェインの不安定な緊張状態が生じてくる。婚約者となったロチェスターはジェインをロチェスター夫人にふさわしく高価な宝石や衣装で飾り立てようとし、一方ジェインは無一文の自分が彼の完全な従属物になりさがってしまう恐れを抱く。ロチェスターが恋人としてジェインに語る言葉は、因襲的社会の恋人の域を少しもでていない。「小さな暴君よ、今はあなたの時だ。しかし間もなく私の時がくる。そしていったん君を完全に捕らえたら、私のものにして離さずおくために ── こんな風にあなたを鎖に結びつけておくつもりですよ。」(299)ジェインとロチェスターの関係が極めて主観的に語られるこの作品において、彼らふたりに対する周囲の人々の反応はほとんど

入り込む余地はない。わずかにフェアファックス夫人の口を通して「結婚というようなことにおいては、身分や財産が釣り合っていることが望ましいのですよ」(293) と語られるにすぎない。ジェインは即座にこのような世俗的価値観を軽蔑するが、ロチェスターの社会的地位の優位性は現実のものである。ジェインが植民地にいる叔父からのわずかな財産を当てにしてしまうのも、ロチェスターへの従属感を薄めたいからである。精神的対等関係だけで真の平等と言いきるには、ジェインは自らの立場が余りにも不安定であることを認識している。

そしてまたロチェスターとても、バーサという狂える妻の存在を隠していたことで決して対等ではなかった。ソーンフィールド邸の屋根裏に10年間も閉じ込められ、野獣のようにはい回り、唸り声を上げる「紫色のむくんだ容貌」のバーサは、愛と平等だけが欠けていたと言われる悲劇的結婚の無惨なまでの犠牲者でもある。ミス・イングラムタイプの大柄な美人だったバーサは、家族の勧めるがままにロチェスターを虜にし、妻に収まる。しかし性来の放縦に遺伝的狂気の要素が加わったとしても、夫から忌み嫌われ打ち捨てられ、屋根裏に閉じ込められたバーサは、家父長制社会での結婚という牢獄につながれた女性の悲劇として、ジェインへの恐ろしいまでの警告となる。屋根裏に閉じ込められたバーサは、赤い部屋に閉じ込められたジェインの恐怖へと連なるものである。ギルバートとグーバーが述べているように、バーサはゲーツヘッド以来ジェインが抑えてきた怒り狂う秘密の自我、因襲的社会への怒りを込めた罪深き自我であり、ジェインの最も恐ろしい分身である。[8]バーサが襲いかかるのは、夫であるロチェスターや兄のメイスンであり、ジェインにではない。彼女の狂気の底に潜むものは、自分を支配し閉じ込め囚人としてしまった家父長たちへの怒りである。また結婚への漠とした恐れを抱くジェインの結婚式用の高価なベールを悪鬼のようにバーサが現れてそれを引き裂くとき、それはジェインの意識下の願望を代行していることになる。ジェインはロチェスターとの精神的対等を認めながら、彼の心の奥底には、再び抑圧的家父長的存在になりうる可能性を内包していることを秘かに感じとっているのである。

ソーンフィールドでのなにげない、しかし非常に印象深い光景がある。ジェインがリード夫人の臨終を看取って、ソーンフィールドに再び戻ってきたときのことである。夜、フェアファックス夫人は編物を始め、ジェインは夫人のそばの低い椅子に腰をおろし、アデールは絨毯にひざをついてジェインに寄り添っている。お互いの愛情が「黄金のような平和な輪」で彼女たちを取り囲んでいたとき、ロチェスターがやって来て、このいかにも仲むつまじい光景を満足気に眺め、フェアファックス夫人に「再び養女が戻ってきたのだからもう大丈夫でしょう」と言い、アデールには「またイギリスのかわいいお母さんに思う存分甘えようとしているのだね」(274) と話しかける。ジェインはソーンフィールドで血のつながりがない、つかの間の家族のようなものを手にいれる。しかしそれぞれが未亡人、孤児、私生児、過去から逃れようとあがく放浪者といったように、孤独で、存在のあいまいさを抱えており、静かな魅力あふれる一枚の家族の肖像画のような光景の中に、もろく不安定なあやうさが漂っている。そしてそれは何よりもソーンフィールドがジェインにとって一時的な安住の場にすぎないことを暗示している。ソーンフィールドはジェインの魂を解放し、理想的対等関係の夢をかいま見せてくれる。しかし本物の対等関係の実現に至るには、精神的な対等だけでは足りないことをシャーロット・ブロンテは十分認識していたものと思われる。

4

ロチェスターがジェインを「自分と似たもの」と直観的に認識したように、セント・ジョンもジェインの中に自分と同じ性質のものがあることを見て取る。そしてセント・ジョンの場合、この同じ性質とは広い世界での活動的生活への渇望である。子供の頃、耐えがたい抑圧の象徴である赤い部屋に閉じ込められたとき、ジェインは餓死による赤い部屋からの解放を願ったことがあったが、二重結婚をもち出してきたロチェスターのもとを逃げ出したとき、ジェインはまさしくこの第二の赤い部屋から精神的にも肉体的にも飢餓状態で逃がれ荒野をさまよう。リード家から餓死による解放を願ったジェイン、そして本物の飢餓状態に陥ったジェインを助けるリヴァーズ家。リード家のジョン、イライザ、ジョージアナとリヴァーズ家のセント・ジョン、ダイアナ、メアリーは非常に興味深い対照をなしている。人生の基点でジェインが投げ込まれたリード家と、放浪の果てに出会うリヴァーズ家は、どちらもジェインにとっては親類でありながら対極に位置している。そしてジョン・リードとセント・ジョン・リヴァーズは、この対照的な名前の通り、全く正反対の運命をたどる。自己抑制ということを知らないジョンは、欲望に引きずられ自滅の道をたどり、一方セント・ジョンは宗教的な大望を抱き、伝道師という厳しい自己犠牲の生き方を選ぶ。

セント・ジョンは田舎の牧師生活の単調さがもたらす耐えがたい閉塞感に苦しみ、彼の野心はそのはけ口を求めてあがいている。文学者、芸術家、著述家、雄弁家、政治家、軍人といった栄光、名声、権力への渇望がセント・ジョンの牧師の服装の下で激しく脈うっている。このようなセント・ジョンをつき動かす衝動は、ジェインの有意義で活動的生活への激しい憧れに相通ずるものである。

> 人間は平穏な生活に満足すべきである、と言ってみたところでむだである。人間は活動をもっていなければならない。…女性は非常におとなしいものと普通考えられている。けれども女性もまた男性とまったく同じように感じるのだ。その兄弟たちが必要とするのと同じように、自分たちの才能を働かせ、努力を発揮する分野を必要としているのだ。(141)

男性であるセント・ジョンは、自分の才能を働かせ、努力を発揮する分野を実際に手に入れる可能性をもっており、事実インドへの伝道という形で野心を実現しようとする。セント・ジョンが自らの使命達成の助力者として、ジェインに求婚するとき、ジェインはセント・ジョンを通じて彼女が求めてやまぬ有意義で活動的生活を実現する手段を与えられたことになる。セント・ジョンの非情ともいえるほどの義務優先の姿勢は、ジェインに恐れを抱かせると同時に、彼のヒロイズムはジェインの心を揺り動かす。自らの安穏を顧みず貧しい者や病人を訪ねて回るセント・ジョンの姿は、ジェインの内にある自己犠牲への願望に訴えかけてくるものがある。

セント・ジョンはジェインの中に「従順、勤勉、無欲、忠実、誠実、不屈、勇気、やさしさ、雄々しさ」(429) を認め、伝道師の妻であり協力者となることを望む。しかし自ら厳格な自己抑制を貫くセント・ジョンはジェインにも伝道という大義のために同じく厳しい自己抑制を強いてくる。セント・ジョンに「あなたは勤労のためにつくられたのであって、恋愛のためにつくられたのではない」(428) と言われるとき、ジェインの自己犠牲への衝動は大きく揺らぎを

生ずることになる。セント・ジョンは、自分という存在を通してジェインにも神の使徒として働く意義ある機会を与えようと申し出る。しかしそこには決定的に欠けているものがある。セント・ジョンには男女の愛など、彼の義務遂行にとって邪魔であるどころか無用のものである。彼がジェインに求めるのは、ただ有能な助手としての存在である。かくして彼の峻厳な道徳観、義務感は、ジェインを抑圧する力となって彼女を支配し始める。

「私は生涯、私の影響下におきうる、そして死が訪れるまでしっかりと離さずにおける唯一の助力者」(431)である妻を求めているのだとジェインを説得する。「こんな風にあなたを鎖でつないでおくのだ」と言うロチェスターの言葉と奇妙にも似かよっている家父長的発言でありながら、ロチェスターと違い、愛のないセント・ジョンの言葉はジェインを震え上らせる。「心から愛する人の愛情を得るためだったら、自分の腕の骨を折られてもかまわない」と言い切ったジェインにとって、愛する人のためという前提条件がなければ、燃えるような自己犠牲の精神もただの隷属状態を生み出すものでしかない。

> …彼の妻としていつも彼のそばにいて、常に束縛され、常に抑えつけられ、自分の生来の情熱の火を弱々しく内部に向かって燃やすことしか許されず、その閉じ込められた炎が、つぎつぎに内臓を焼きつくしていっても、泣き声をあげることもできない —— それはとても耐えられない。(433)

リード家では、ジェインの意志に関係なく運命で隷属状態に投げ込まれたが、セント・ジョンとの場合は、ジェインが自らの意志で隷属を選びかねない立場に追い込まれる。ジェインが、セント・ジョンは「英雄や立法者、政治家、征服者を作っているものと同じ素材でできている」(418) と言うとき、彼女はセント・ジョンを典型的家父長的タイプの人物と見なしているのである。義務遂行のためにジェインに厳しい自己犠牲を求めてくるセント・ジョンは、欲望を優先させようとしたロチェスターよりはるかに危険な誘惑者となる。セント・ジョンとの結婚は、ジェインにとってまさしく「光のさすことのない牢獄」であり、「鉄のきょうかたびら」に身を包まれて、「完全なるいけにえ」となることであった。人形のような飾りものではなく、有能な伴侶の名目で、しかも自分の影響下に置き、支配しようとすることこそ、ジェインが怒りと共に立ち向かわなければならないものであった。「私はあなたの愛についての考え方を軽蔑します」とジェインは叫ぶ。たとえ「ジェーン、ジェーン」という、あの不可思議なジェインを求めるロチェスターの声が聞こえてこなかったとしても、やはりジェインはセント・ジョンを拒絶していたことだろう。ジェインが最も望んでいたものは、愛と安住と本物の家族であり、その中にあってこそジェインの自己犠牲の精神は尽きぬ喜びをもって、その対象を見い出しえたからだ。

*

パミラはB氏の悔い改めと尽力によって奥方の地位へと引き上げられた。しかしシャーロット・ブロンテは、女性が男性の尽力で男性の社会的地位の高みにまで引き上げられるだけでは真の対等関係は生まれないと考えているようである。ロチェスターは火事で視力と左腕とソーンフィールド邸を失うという代償を払い、一方ジェインは叔父からの5,000ポンドの遺産、由緒

ある家柄の出身だったというおまけをつけて初めて物心共に安定した対等関係を手に入れる。言い換えればロチェスターにそれだけの代償を払わせなければならないほど、家父長制社会の中で置かれた女性の立場が弱いということでもある。ふたりの最初の出会いのときのように、今やジェインの手助けなしには動けなくなったロチェスターは、ジェインの手助けを喜んで受け入れながらもジェインは犠牲になることが好きなのだとからかう。それに対してジェインは次のように答える。

「犠牲ですって。私が何を犠牲にするというのですか。飢えの代わりに食べ物を、はかない望みの代わりに満足を得たのですよ。大切な人を抱きしめ、愛する人に唇をあて、信頼する人によりかかることができるのですもの。それが犠牲になることでしょうか。もしそうなら私は確かに犠牲になることが好きですわ。」(470)

ジェインにとっては、あくまでも根底に愛が、そして対等な関係があってこそ、自己犠牲はもはや自己抑圧ではなく、積極的価値ある行動へと変容するものである。

シャーロット・ブロンテは、『ジェイン・エア』の中で理想的対等関係確立への願望を燃えるような情熱と共に語る。しかしジェインとロチェスターとの間に生まれたのが跡継ぎの男子であったという設定――また『教授』の中でも主人公たちの間に生まれた子供は男子であった――は、シャーロット・ブロンテ自身の、まだ社会的慣習を否定しきれない保守的側面をものぞかせているように思われるのである。家父長制社会の抑圧からの女性解放、男女の理想的対等関係といった理想を、結婚の形態の中に調和させようとするとき、シャーロット自身、秩序と解放との間で揺れ動いているように思われるのである。

注

(1) Austen, Jane. *Northanger Abbey.* Penguin Books, 1972, P. 38
(2) Gaskell,Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë.* Everyman's Library, London : J. M. Dent & Sons, 1974, P. 215
(3) Gilbert, Sandra M. & Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic.* New Haven : Yale University Press, 1979, PP.338-39
(4) Brontë, Charlotte. *Jane Eyre.* Penguin Books, 1966, P. 44. 以下このテキストからの引用はページ数のみを記す。
(5) Mores, Ellen. *Literary Women.* New York : Anchor Books, 1977, PP. 255-56
(6) *Ibid.*, P. 257
(7) Shorter, Clement ed. *The Brontës, Life and Letters* Vol.1, New York : Haskell House Publishers Ltd., 1969, P. 158. エミリー・ブロンテ宛、1839年6月8日
(8) Gilbert & Gubar, PP. 359-60